



ほ 多 当

◆建設的な生き方へのお手伝い (Just do it!) ◆

～あなたの悩み事は当社までご相談下さい～

【今月の一冊】 幸せをつかむ「4つの地図」の歩き方

ロバート・G・アレン 著 フォレスト出版

ホームページ <https://primecorporation.jp/>

発行日 2026年8月1日 Vol. 286

発行元 有限会社プライム・コーポレーション

代表取締役 渡 邊 敏 徳

〒401-0015 山梨県大月市大月町花咲 1660 番地

Phone 0554-22-2810 Fax 0554-67-8006

命の期限

私たちの「命の期限」は医学的にも哲学的にも一義的には決められませんが、統計的には人間の寿命はおおよそ120歳前後と「事実上の上限」があると考えられているそうです。個人の命の終わりは病気・事故・老化など多くの要因が重なって決まります。

医学・統計では「平均寿命」「死亡率」「最高寿命」などで命の長さを扱います。研究では、人間が120歳を大きく超えて生きる確率は極めて小さく「いつ死ぬか」を正確に予測する方法は存在しません。

「命の期限」という言葉をどう捉えるかは、人生における非常に深遠で、かつ個人の価値観が色濃く反映されるテーマです。「命の期限」を考えることは決してネガティブなことではなく、「今をどう選ぶか」という指針を研ぎ澄ます作業なんだと思います。

故スティーヴ・ジョブズ氏が2005年に母校で行った伝説の卒業スピーチの中での有名な言葉ですが、「今日が人生最後の日だとしたら、今日やろうとしていることを本当にやりたいか？」という問いです。

これは「何もしないこと」を推奨するものではなく、「やりたいことあるいはやるべきことに、どれだけ純粋な情熱を注いでいるか」を確認するフィルタリングです。忙しい日々の中で、情性で取り組んでいるタスクと、本当に価値を感じているプロジェクトを分けるための強力なツールになります。

また、人は「自分が死んだ後何を残せるか」を考えたとき、「命の期限」に対する恐怖が和らぐことがあります。自分自身が育ててきた企業が、地域にとってのインフラとして残り続けること。研修講師として伝えた考え方が、受講生の人生を変え彼らを通じて次世代へ繋がること。家族や大切な人に培った知識や経験を、後の世代へ明確に継承することなど。

自分という個人の生命は有限でも、自分の行いが社会というシステムの中で「残り続ける」ことを実感できれば、「期限」という概念は「終わり」から「継承」へと変化していくことになります。



「命の期限」を考えることは、「自分が何に対して責任を負いたいのか」を明確にすることだと思うのです。今月はお盆の季節となりますが、それぞれが命のつながりを強く感じられる時期だと思います。ゆっくりと考える時間を持つのもいいかもしれませんね。

2026サッカーW杯

2026年 FIFA ワールドカップが史上最大規模の大会として先月開催されました。アメリカ・カナダ・メキシコの3か国共催、48か国参加、104試合という、これまでの大会とは大きく異なる大会となりました。優勝はスペインで、連覇を目指したアルゼンチンが準優勝で延長戦という激戦の中でスペインが1-0で勝利しました。

今大会から参加国が48チームに増えましたが、「予想以上に格下国が強豪国を苦しめる試合が増えた」「接戦が多かった」「新興国のレベルアップが目立った」などいい評価が多く見られました。カーボベルデやコンゴなどが健闘し「世界のサッカーの底上げ」が確認できました。世界的に人気が拡大し、約700万人がスタジアムで観戦、テレビ・配信視聴者数も過去最高クラス、アメリカ国内でも過去最高レベルの視聴率となり、商業的には大成功でした。

一方で見えてきた課題としては、試合数が多すぎることによる選手の疲労、ケガなどがあり、3か国開催により移動距離が長く、時差や気候面が選手やサポーターの負担となりました。そして、最も大きな批判の一つが「サッカーよりもビジネス優先」という FIFA の商業主義の批判が世界中から出ました。

2026年大会は、「48チーム制でもワールドカップの魅力は維持できる」ことを示した一方で、選手への負担、商業化という課題も浮き彫りになりました。商業的には史上最高レベルの成功を収めました。しかし、「サッカーという競技の価値をどう守るか」が今後の FIFA に問われる重要なテーマになってくると思います。



【座右の銘にしたい名言】



人生は楽ではない。そこが面白い。

武者小路実篤（日本の小説家、詩人、劇作家、画家）